



Title	梶井基次郎「城のある町にて」論：峻の〈心〉と「新らしい周囲」との関係の観点から
Author(s)	アブドエルマクスード, ワーイル
Citation	阪大近代文学研究. 2008, 6, p. 49-67
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/92653">https://doi.org/10.18910/92653</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 梶井基次郎「城のある町にて」論

——峻の〈心〉と「新らしい周圍」との關係の観点から——

アブドエルマクスード・ワール

## 一、はじめに

「城のある町にて」は、大正一四年二月に同人雑誌『青空』に発表された短編である。後に、昭和六年五月に武蔵野書院刊で出版された『檸檬』に所収された。梶井基次郎が三重県松阪の姉夫婦の家で過ごした日々<sup>1)</sup>の出来事を描写した本作は、「ある午後」「手品と花火」「病氣」「勝子」「晝と夜」「雨」の六章から構成されており、梶井の作品の中で最も長いものである。

まず、梗概を確認しておこう。主人公の峻は可愛い妹の死について落ち着いて考えてみたいという一種の感慨から姉一家の家へやって来る。そこには見晴らしのいい城跡があり、そこからの平野の景色、町の様子を眺めていると、少年のころに憧れていた「単純で、平明で、健康な世界」が目の前によみがえってくる。その自然の美しさと人々の何気ない素朴な暮らしぶりに峻の〈心〉が和む。峻の心情と情景描写と日

常の飾らない会話が作品の中心である。

先行研究を概観すれば、従来の本作品の捉え方は二つに大別することができる。一つ目は、「生死」の観点と関連するものである。例えば、鶴田欣也氏は「城のある町」での経験によつて主人公が「徐々に死から逃れ生命に近づいて行く」と主張する。これと同様の見解には、古閑章氏の「『城のある町にて』が死と生を作品の生地に潜めながら、死に際会した人間の生への参入のドラマを展開している事実は否定し得ない」<sup>2)</sup>というものがある。古閑氏は鶴田氏の見解を引き受けながら、「主人公のまなざしは、同時に自己の病的の収斂する世界をも秘かに見透すまなざしに他ならなかった」と指摘している。

「城のある町にて」を作者梶井と関連付けて読む論文は少なくない。例えば、渡部芳紀氏や黒田征氏は〈肺患〉としての梶井と結び付けながら、論を進めている。渡部氏は「主人公の峻は『彼は一度肺を悪くしたことがあつた』と、過去に

病氣をしたことになっているが、現在のことに触れていない。『昼と夜』や『雨』の小話に出て来る『底熱い興奮』や『疲労』、手足の『軽く熱を持つてゐる』背後には、結核というものが考えられるのだ」と主張する。また、黒田征氏

は本作品について『城のある町にて』は、梶井基次郎という肺患の青年が、自己の将来の不安に抗いながら、なおも、生命の美しさを肯定しようとする意志の力によつて建立した、記念碑である」という渡部氏と同様の見解を示す。さらに、梶井基次郎の「全作品中いちばん明るく、健康的なものの」という本作品に対する評価に対して、『新しい生活』

への意志が『城のある町にて』に流れる主調であると了解することは、誤りであろう。(中略)『城のある町にて』に、梶井の『新しい生活』への希望や病気の回復、を読み取ろうとする論者は多いが、しかし、この作品にも、依然として病める梶井の暗い影は色濃くにじんんでいるのである」というように本作品で注目されて来た(明るさ)を否定し、渡辺氏と同様の見解を提出するのである(注3参照)。だが、右の黒田氏や渡辺氏の論のように、作品世界の背後には(肺結核)という病氣があると結論付けるのはいささか早計ではなからうか。なぜなら、峻が「手足が軽く熱を持つてゐる」ことや時々「疲労」を感じることは、必ずしも(肺結核)を意味しているとは限らないのである。それは峻を苦しめている不眠によるものかも知れない。また、作品内現在に一切存在しない

(肺結核)という枠組みを通して読むと、作品の提起する問題とかけ離れた、作者の実生活ばかり重視する、作家論に終わってしまう可能性がある。

最後に、梶井の家庭の問題と関連付けて論じる先行研究を見てみたい。渥見秀夫氏は『城のある町にて』は、亡妹への追懐的視線と自己欲求の核心への内省的視線とを自らに禁じ、『異母妹』が明示してしまう父母の『性』の不幸とそれへの自分の拘泥を内密化することで成立した作品世界であった」と指摘する。つまり、氏は作品世界を作者の「父母の『性』の不幸」と結び付けている。

確かに、作者梶井は異母妹の八重子を大正一三年七月(當時四歳)に亡くしており、翌月には松坂の姉夫婦を訪れ、姉宮田富士、夫汎、義母よし、長女寿子とともに過ごしている。また、本作で作者が「松坂に滞在したときの自分の心境を書」<sup>⑧</sup> いていることは、周知のことである。だが、作品の提起する問題は、(肺患者)としての梶井、または梶井の家庭の問題に還元してしまうのではなく、もつと「城のある町にて」の作品の記述に則して論じる必要があるのではないだろうか。序章の「ある午後」に次のような一節がある。

彼女の死の前夜の苦しい経験がやつと薄い面紗のあちらに感ぜられるやうになつたのもこの土地へ来てからであつた。そしてその思いにも落ちつき、新しい周囲にも心が馴染んで来るにしたがつて、峻には珍しく静かな心

持がやつて来るやうになつた。

この部分から、「新しい周囲」と峻の〈心〉が深く関わっていることが分かる。ここで「新しい周囲」とは、「城のある町」という場所の風景と、そこに住んでいる人々を指している。本論では、「生死」の問題という従来の観点や作者梶井の実生活等に縛られることなく、視点人物である峻の〈心〉と「新しい周囲」の関わりに着目する。具体的に言えば、峻の〈心〉と「新しい周囲」としての「風景」、「木々」、「鳥」、「虫」、「水」、「音」、「声」等がどのように関わっているかを検討し、本作品の新たな側面を見出したい。さらに、「城のある町にて」を「六篇それぞれ独立し」、関連性のない〈組曲風〉<sup>(2)</sup>とする通説について検討し、本作品の六つの章がどのように繋がっていくのか考察したい。

## 二、「静かな展望」と峻の〈心〉

### ①「吸ひ込まれ」る〈心〉

ここで、序章の「ある午後」における峻の「吸ひ込まれる〈心〉」について考察したい。まず、『高いとこの眺めは、アアツ（と咳をして）また格段でこわすな』（中略）老人が朗らかにさう言ふ捨てたまま峻の脇を歩みて行つた」という箇所注目したい。作品は、いきなり右の老人の台詞で幕が開く。右の傍線部のように、見知らぬ老人の言動が突然なも

のであったから、峻は次のような反応をする。

「ああ、さうですな」少し間誤つきながらさう答へた時の自分の声の後味がまだ喉や耳のあたりに残つてゐるやうな気がされて、その時の自分と今の自分が變にそぐはなかつた。

眼前の風景にとらわれていた峻が、いきなり声を掛けられて俄かに〈現実〉に引き戻され、戸惑いを覚えたため、「その時の自分」と「今の自分」の間に差異が生じたわけである。だが、峻を当惑させたのは、老人の言動が突然なものであったということだけだろうか。次の箇所から峻の〈心〉の様子を見てみよう。

なんの拘りもしらないやうなその老人に對する好意が頬に刻まれたまま、峻はまた先程の静かな展望のなかへ吸ひ込まれて行つた。（傍点は、稿者）

この部分では、まず「また先程の」とあるわけであるから、峻は老人に声を掛けられるまで「静かな展望のなか」に「吸ひ込まれて」いたことが分かる。峻の〈心〉は「風景」に溶け込んでいる。また、「その時の自分」と「今の自分」の差異を感じたことから、峻が自分の〈心〉の内部を意識していることが分かるだろう。したがって、峻の〈心〉は、「風景」の中に没入した状態から、「自分」の有り様を意識する状態へ、というように描かれていることが指摘できる。

さらに、ここで注目したい点が二つある。一つ目は、峻の

そのような「好意」の気持ち「そんな老人」の（滑稽）な様子<sup>⑥</sup>及びその「朗らか」さと関わっていると思われることである。佐藤昭夫氏は老人の「朗らか」な態度について「老人の『朗らか』さと、風景の『静か』さは対照的であり、対極的であ」<sup>⑦</sup>ると述べているが、果たして両者は「対極的」と言い切れるだろうか。むしろ、主人公の峻をこうした「展望に吸い込ま」せた「静か」さは、「そんな老人」に対して「好意」を寄せた「なんの拘りもしらない」気持ちやその「朗らか」さと響き合うものと考えられる。なぜなら両者は峻の心を惹き付ける点で共通しているからである。前述したように、先行研究では老人のちぐはぐな格好が（滑稽化）されていることが指摘されてきた。確かに、冒頭の調和がとれていない老人の外観は（滑稽）である。しかし、老人の言動から何が読み取れるか、また冒頭に「そんな老人」を掲げる（意味）等についても考察すべきである。この冒頭の一節では、老人の突然の言動から「その時の自分」と「今の自分」の差異を感じる峻の姿が描かれているだけではなく、「そんな老人」に対する峻の好感も語られている。この点を考慮に入れると、作者はこの老人を登場させることを通して「城のある町」の人々の「朗らか」な側面を示そうとしているだけではなく、視点人物である峻の「こんな田舎」に来てからの心境（とりわけ、静かな展望を眺めている時の心境）を語ろうとしているのではないかと考えられる。つまり、冒頭の老人の登場を

きつけに、峻の（心）が表出されはじめるのである。

二つ目に注目したい点は、「好意が頼に刻まれたまま」とあるように、顔に表れている「好意」の感情が消えないうちに峻が再び「静かな展望のなかへ吸ひ込まれて行つた」という点である。つまり、「静かな展望のなか」に心が奪われていた峻が老人に声を掛けられても、先程の情緒や雰囲気を短時間で、苦勞なく取り戻すことができたのである。それは、老人の言動が峻にとつて邪魔物ではなかったことを示すのみならず、眼前の風景に容易に「吸ひ込まれ」る峻の（心）を表していると言えよう。次に、「静か」という言葉に注目したい。「城のある町にて」においては、この言葉がキーワードと言えほどおびただしく使用されている。例えば、次の箇所を見てみよう。

- ① 「入道雲が水平線の上に静かに蟠つてゐる。」
- ② 「静かな展望のなかへ吸ひ込まれて行つた。」
- ③ 「今日も入江はいつものやうに謎をかくして静まつてゐた。」
- ④ 「彼はなほさらこの静けさの中で恭しくなつた。」

- ⑤ 「さうした心の静けさとかすかな秋の先駆は、（後略）」
- ⑥ 「珍しく静かな心持」

これらの表現は「ある午後」という序章の特徴を示している。つまり、①～⑥までの引用部分から「ある午後」の底流にある穏やかな雰囲気ないしは「心の静けさ」が読み取れるであ

ろう。そして、①、②、③、④という「静か」な「風景」は、⑤、⑥に見られる峻の（心の静けさ）をもたらしめているのではないかと考えられる。また、それは峻の（心）と「風景」が如何に関わっているのかを示しているわけである。

「風景」に「吸ひ込まれ」る（心）の描写は、梶井の他の作品にも見られる。例えば、「蒼穹」という短篇に「そんな風景のうへを遊んでゐた私の眼は、二つの涙をへだてた杉山の上から青空の透いて見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、不知不識そのなかへ吸ひ込まれて行つた」<sup>15</sup> という箇所がある。ここでも、主人公が空の風景に「吸ひ込まれ」る場面がある。特に注目に値するのは、「城のある町にて」の冒頭で峻が「高いとこの眺め」の「なかへ吸ひ込まれて行つた」と同様に、「蒼穹」においても主人公「私」の眼が「杉山の上から」「湧いて来る雲」の「なかへ吸ひ込まれて行つた」ことである。ここでは、両作品で同じような表現が使用されていることに加え、両者ともに「高いとこ」に吸ひ込まれる点が注目されよう。さらに、「たかし」という名前が三人の主人公（「冬の日」の堯、「城のある町にて」の峻、「ある心の風景」の喬）に与えられていることも見過ごせない。

次に、石川啄木の作品における類似した表現に着目したい。石川啄木の『一握の砂』に所収された「煙」（一）に次の箇所がある。

師も友も知らず責めにき  
謎に似る

わが学業のおこたりの因

教室の窓より遁げて

ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

不來方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし十五の心<sup>16</sup>

ここで、まず舞台設定が「城のある町にて」の冒頭と同様「城跡」であることが注目される。次に、両者の主人公の置かれている状況を見てみよう。「城のある町にて」の場合、「可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考へて見たいといふ若者めいた感慨」のために、峻が城跡に逃げて来る。同じように、「煙」の主人公も学業をおろそかにして、その理由を知らない教師や友だちに責められることから逃げ出し、誰もいない城跡にやって来る。さらに、両者ともに城跡から眺める空や展望に心が吸われている。舞台設定、主人公の置かれた状況、そして「風景」に心が吸われることまで、「煙」の引用部分は「城のある町にて」の冒頭と酷似している。

## ②入江の「謎」と峻の〈心〉

ここで、城跡から入江の風景を眺める峻の心の働きについて考察したい。次の部分を見てみよう。

峻は此の城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖になつてゐた。(中略)そして入江には舟が舳つてゐる氣持。それはただそれだけの眺めであつた。何處を張り立てて特別心を惹くやうなところはなかつた。それでゐて變に心が惹かれた。

まず、この部分では、「變に心が惹かれた」ことに注目したい。点線部分から分かるように、入り江の眺めは特別なものではないのに、峻の〈心〉が「變に」惹かれているのである。これは、「ある午後」に見られる「蟬取竿を持つた子供がちこちする。蟲籠を持たされた兒は、時どき立ち留まつては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに随いてゆく。物を云はないでゐて變に芝居のやうな面白さが感じられる」と似通っている点に注目したい。眺めている対象である「物を云はないでゐる子供の行動、ないしは「特別心を惹くやうなところはなかつた」入江の風景に「變に」惹かれることは、目の前にある何ものかに惹かれやすい峻の〈心〉を暗示するのではないかと思われる。また、「登る度」、「幾度となく」、「癖になつてゐた」という言葉は、如何に峻の〈心〉が

「入江の風景」に惹かれているかを明示するであろう。さらに、峻の〈心〉は入江に対して次のような氣持ちを抱く。

なにかある。本當になにかがそこにある。といつてその氣持を口に出せば、もう空ぞらしいものになつてしまふ。

(中略)然し自分では「まだなにか」といふ氣持がする。傍線部からは、どれ程、峻が入江に執着しているかが分かる。しかし、点線部のように「その氣持ちを口に出せば、もう空ぞらしいものになつてしまふ」とあるから、自分でも充分に説明できない段階である。そのような氣持ちは、次の箇所に見られる。

人種の異つたやうな人びとが住んでゐて、此の世と離れた生活を営んでゐる。——そんなやうな所にも思へる。とはいへそれはあまりお伽話めかした、びつたりしないところがあつた。

傍線部のように、峻は入江に対する自分の氣持ちを言葉で説明しようとするが、結局それは「びつたりしないところがあつた」とされている。しかしそうしている間に、峻は次のように思へる。

では一體何だらうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添へるものである。しかし入江の眺めはそれに過ぎてゐた。そこに限つて氣韻が生動してゐる。そんな風に思へた。

ここで、峻は初めてびつたりした言葉で自分の氣持ちを説明

することができ、入江の眺めには生き生きとした（生命的）なものを感ずるのである。しかしながら、依然として入江に「謎」が隠れているというような気持ちは残る。

今日も入江はいつものやうに謎をかくして静まつてゐた。見てみると、獣のやうにこの城のはなから悲しい唸聲を出して見たいやうな氣になるのも同じであつた。息苦しいほど妙なものに思へた。夢で不思議な所へ行つて

みて、此處は來た覺えがあると思つてゐる。——丁度それに似た氣持で、えたいの知れない想ひ出が湧いて來る。

ここで、いくつかの点に注目したい。まず、「そこに限つて氣韻が生動している」と言つても、まだ峻には「入江の眺め」は「謎」のようである。そして、その入江の持つ「謎」も、峻の（心）に湧いてくる「えたいの知れない想ひ出」も、実體のつかめない不思議なものであり、峻の（内面）と「風景」の間には相互の連関が見えるのではないかと思われる。

次に、傍線部の「獣のやうにこの城のはなから悲しい唸聲を出して見たいやうな」氣持ちについて考察してみよう。「城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖になつてゐた」ほど、峻は入江の風景に惹かれてゐる。そして、入江の隠している「謎」が、いつの間にか解けるのではないかという期待を抱きながら、入江の「謎」に思いを巡らす。だが、入江の「謎」がなかなか解けない。そのことから、入江はある種、峻の力を越える存在であるかのように描かれていると言えよ

う。かえつて、「えたいの知れない想ひ出」を呼び起こされ、峻は「悲し」く感ずるのである。

だが、都市生活者としての峻にとつて、「田舎」の「風景」は、以上に見てきた「静かな展望のなかへ吸ひ込まれ」ることや入江の「謎」の程度にとどまらないのである。次に、彼の「都会」に対する心情について考察してみよう。

### 三、「田舎」への〈脱出〉の意味

語り手は、「一つには、可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考へて見たいといふ若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出て此の地の姉の家へやつて來た」と述べる。語り手は右の引用部分で主人公峻の置かれてゐる状況について説明をしようとするのである。とは言へ、語り手は峻が何歳であるか、学生か社会人か等を明白にせず、ただ彼が「城のある町」に足を運んだ「一つ」の理由しか述べない。ところが、作中で峻が「可愛い盛りで死なせた妹のこと」を考へるのが、先の引用の直後の一場面のみであることは見過ごせまい。果して峻が「こんな田舎」にやつて來たのは、本当に「失つた」妹のことを落ちついて考へて見「るためだつたのだらうか。「一つには」（点線は、稿者）とあるからには、語られていない他の理由があると推察できよう。

「失つた」妹の冥福を祈る「五七日」がまだ過ぎていないにもかかわらず、なぜ峻はこの地にやつて来るのであるうか。第一に、それは峻の「家」という（空間）と関係しているように思われる。次の点線部を見てみよう。

いつも都會に住み慣れ、殊に最近、心の休む隙もなかつた後で、彼はなほさらこの静けさの中で、恭しくなつた。

ここから、妹を失つた後、住み慣れた「都會」で「心の休む隙もな」かつたことが分かる。「都會」には、（居住空間）としての峻の「家」だけではなく、「家」のイメージをなすもの、すなわち居住者としての峻および家族の他のメンバーの存在が含まれることを視野に入れておく必要があるだろう。序章の「ある午後」には次の一節がある。

「たくさんの蟲が、一匹の死にかけてゐる蟲の周圍に集つて、悲しんだり泣いたりしてゐる」

と友人に書いたやうな、彼女の死の前後の、苦しい経験が、やつと薄い面紗のあちらに感ぜられるやうになつたのも、此の土地へ來してからであつた。

傍線部とほぼ同じ表現は、後に書かれた「冬の日」の（二）注12（二二三頁參照）にも見られ、友人の近藤直人宛の大正一三年七月六日の書簡（注12 第二卷九五頁參照）にも似たやうな表現が使用されていることは注目に値する。

・そして妹の延子も腰椎カリエスで、意志を喪つた風景のなかを死んで行つた。其處では、たくさんの蟲が一匹の

死にかけてゐる蟲の周圍に集つて悲しんだり泣いたりしてゐた。（「冬の日」）

・妹の看病をしてゐる時私はふと大きな虫が小さな虫の死ぬのを傍に寄添つてゐる——さういふ風に私達を想像しました」（近藤直人宛書簡）

傍線部から、峻が病床の妹だけではなく、自分を含めた家族全員の存在をどのように思つてゐるのかを読み取ることができ、この部分には集まつて悲しみ泣くだけしかできない峻、そして家族のメンバーの（無力さ）が明示されている。このようにして、峻の「家」が、妹の死に際して頼りなくて儂い者たちの集う場所として設定されているのだ。さらに、住み慣れた「都會」に対する（心情）において共通するのは、「ある心の風景」の次の一節である。

「人が通る、車が通る」と思つた。また、

「御では自分は苦しい」と思つた。

川向ふの道を徒歩や車が通つてゐた。（中略）

「御では自分は苦しい」（『ある心の風景』の「四」）

さらに、「彼女の死の前後の苦しい経験」とあるから、妹が死んでも「苦しい経験」にけりが付かなかつたことが分かる。峻はそうした（空間）としての「家」、及び「心が休む」余裕のない「都會」での生活が疎ましくなり、まだ五七日を出ない頃の家から出てこの地に（脱出）しようとしたのではないかと考えられる。

峻が田舎にやって来てからの、「そしてその思ひにも落ちつき、新しい周囲にも心が馴染んで来るに随つて、峻には珍らしく静かな心持がやつて来るやうになつた」という一文からは、「此の土地」が如何に彼の（心）を落ち着かせたかが分かる。しかし、峻の心を和ませる「新しい周囲」としてのこの田舎の作用はこれにとどまらない。次の引用を見てみよう。

「単純で、平明で、健康な世界。——今その世界が彼の前にある。思ひもかけず、こんな田舎の緑樹の蔭に、その世界はもつと新鮮な形を具へて存在してゐる。」

そんな國定教科書風な感傷のなかに、彼は彼の營むべき生活が示唆されたやうな氣がした。

この部分から分かるように、「最近心は心の休む隙もなかつた」「都會」に対して、「こんな田舎の緑樹の蔭に」憧憬の世界が存在しているのみならず、これから彼が「營むべき生活」までが、単純で健康的な「感傷のなかに」仄めかされるのである。要するに、「都會」から「此の土地」へ〈脱出〉した峻は、妹の「死」んだ「都會」から心和む「田舎」へと逃げ出すだけでなく、そこで己の營むべき暮らし、生き方に気付かされたやうな氣持ちになるのだ。

本作品では、峻はこのように「都會」から「田舎」へ〈脱出〉する。だが、断つておきたいのは、『ある心の風景』の主人公は「街では自分は苦しい」と繰り返しているのに

対し、「城のある町にて」では「都會」そのものが峻にとつて常に不愉快な場所ではなかつたと考えられることである。先に引用した箇所から分かるように、「都會」は「いつも」住み慣れ「ている場所として語られている。さらに、「殊に最近心は心の休む隙もなかつた」（傍点は、稿者）とあるから、常にはではなく妹の死んだ近頃のことを指しているのである。要するに、峻の〈脱出〉は「都會」そのものからというよりも、むしろ〈苦惱〉のある場所からの〈脱出〉である。同種の〈脱出〉は、脱出先は「田舎」ではなく「都會」であるが、梶井の「冬の蠅」の主人公「私」にも見られる。

・「私は早く都會へ歸り度い。歸り度いと思ひながら二た冬もゐてしまつたのである」（一）

・「山や溪が閑ぎ合ひ心を休める餘裕や安らかな望みのない私の村」（二）

「都會」へ歸るのを望む主人公「私」は、むしろ「心を休める餘裕」のない場所である「私の村」からの〈脱出〉を考慮しており、この心情は峻のものと同じ通している。そして、「心を休める餘裕や安らかな望みのない私の村」が「城のある町にて」の「心の休む隙もなかつた」「都會」に相当するものとなっている。以上のことから、梶井の「城のある町にて」で描いている「都會」から「田舎」へ、ないしは「冬の蠅」に見られる「私の村」から「都會」へ戻る望みを抱く主人公は、「都會」又は「田舎」そのものを求めているというより、

むしろ「心の休む隙もな」い場所から〈脱出〉することを目指しているのではないかと考えられるのだ。

#### 四、「風景」と「憶ひ出され」という行為

この項では、「先ほどの花火」といったような直前の出来事や「幼い時」のこと等が「憶ひ出され」という行為の機能について考察したい。その際、「憶ひ出され」という言葉そのものではなく、その行為を重視したい。したがって、何かについて「憶ひ出され」る場合のみならず、「蘇つて来た」「湧いて来た」「思ひ浮んだ」等の同様の意味の言葉が使用されている場面も考察の対象とする。

#### ①不愉快からの〈脱出〉

まず、「手品と花火」で、芝居小屋で手品が始まる直前の場面を見てみたい。

日本人のやうでない、皮膚の色が少し黒みがかつた男が不熱心に道具を運んで来て、時どきじろと観客の方を見た。ぞんざいで、面白く思へなかつた。それが濟むと怪しげな名前の印度人が不作法なフロックコートを着て出て来た。(中略)唾をとばしてゐる様子で、褪めた唇の兩端に白く唾がたまつてゐた。

傍線部は、手品の準備をする男とインド人の手品師に対して峻が抱く悪い印象と不愉快な感情を示している。さらに、観客から選ばれた立会人の男と手品師が握手する次の場面で峻の不快感は増す。

印度人は非道い奴であつた。

(中略)印度人は自分の手を引き込めて、観客の方を向き、その男の手振を醜く眞似て見せ、首根つ子を縮めて、嘲笑つて見せた。毒々しいものだつた。

続いて、インド人の態度やそれに対する峻の反応を語る次の部分を見てみたい。

男は印度人の方を見、自分の元ゐた席の方を見て、危な氣に笑つてゐる。なにか譯のありさうな笑ひ方だつた。子供か女房かがあるのぢやないか。堪らない。と峻は思つた。

握手が失敬になり、印度人の悪ふざけは益々性がわるくなつた。見物はそのたびに笑つた。そして手品がはじまつた。

以上の三つの引用は、手品が始まる直前に峻の不快感が募る様子を明示している。しかし、手品が始まって、峻のそのような感情は収まらない。「極詰まらない手品」としか思えず、「彼自身かなり不愉快になつてゐた」と感じるのである。しかし、峻の心には変化が生じる。

そのうちに不圖、先程の花火が思ひ出されて来た。「先

## ②「憧憬」の世界への接近

「晝と夜」での、洗濯する二人の「若い女」を垣間見る場面を考えたい。この場面に見られる峻の異性への意識に関する論及は多いが、本論ではそれとは異なる角度から検討したい。

そこへも緑は影を映して、美しく洗はれた花崗岩の疊石の上を、また女の人の素足の上を水は豊かに流れる。羨ましい、素晴らしく幸福さうな眺めだった。涼しさうな緑の衝立の蔭。確かに清流で豊かな水。なんとなく魅せられた感じであつた。

傍線部から分かるように、これは「羨ましい、素晴しく」「なんとなく魅せられた」思う風景である。ここでは、自分もそうなりたいと望むことを意味する「羨ましい」という言葉に着目したい。峻が二人の女の「幸福さうな眺め」を見て、自分もそのような幸せを味わいたいと感じている。だが、現実にはそれができないことを痛感すると、次のような「歌の文句」が俄かに頭に浮かんで来るのである。

けふは青空よい天氣  
まへの家でも隣でも

水汲む洗ふ掛ける干す。

國定教科書にあつたのか小學唱歌にあつたのか、少年の時に歌つた歌の文句が憶ひ出された。その言葉には何の

程の花火はまだあがつてゐるだらうか」そんなことを思つた。薄明りの平野のなかへ、星水母ほどに光つては消える遠い市の花火。海と雲と平野のパノラマがいかにも美しいものに思えた。(中略)その子供といひ、そのパノラマといひ、どんな手品師も敵はないやうな立派な手品だつたやうな氣がした。そんなことが彼の不愉快を段々と洗つて行つた。いつもの癖で、不愉快な場面を非人情に見る、——さうすると反對に面白く見えて来る——その氣持がものになりかけて來た。下等な道化に獨りで腹を立ててゐた先程の自分が、ちよつと滑稽だつたと彼は思つた。舞臺の上では印度人が、看板畫をつくりの雰圍氣のなかで、口から盛に火を吹いてゐた。それには怪しげな美しささへ見えた。やつと濟むと幕が下りた。

ここでふと別のことが思い出されることで、峻は不愉快な氣持から脱出できるのである。その時、峻の〈心〉が眼前の「極話まらない手品」を受け入れる点は注目に値する。また、ここでは「非人情に見る」<sup>①</sup>ことも、峻の不愉快を解消する機能を持つている。まるで「非人情に見る」ことは、不愉快を愉快にする特殊なフィルターのようである。それは峻が〈他者〉としてのインド人の手品師を批判するより、不愉快なものをも「面白く見」ることを重視し、不愉快な気分からの〈脱出〉を意図的に試みていることを示している。

たくみも感ぜられなかつたけれど、彼が少年だつた時代、その歌によつて抱いたしんに朗らかな新鮮な想像が、思ひがけず彼の胸におし寄せた。

この歌は『尋常小学校読本』三巻の「ダイ十二 せんたく」と題された章に収められたものである。ここでは、眼前の「幸福さうな眺め」及び、それを手にすることができないという〈現実〉が自分の〈心〉に少年時代の思い出を想起させる切つ掛けとなる。そして、傍線部から分かるように、当時歌つていた歌の文句を思い出すことによつて、「しんに朗らかな新鮮な想像」が〈今〉自分の〈心〉に迫るのを感じ、「羨ましい、素晴らしく幸福さうな眺め」に接近することができるとだ。さらに、次の部分を見てみたい。

それには畫がついてゐた。また「四方」とかいふ題で、子供が朝日の方を向いて手を擴げてゐる圖などの記憶が、次つぎ憶ひ出されて來た。

國定教科書の肉筆めいた楷書の活字。また何という畫家の手に成つたものか、角のないその字體と感じのまるで似た、子供といへば圓顔の優等生のやうな顔をしてゐるといつた風の、挿繪のこと。「何とか權所有」それをゴシヨユウと、人の前では讀まなかつたが、心のなかで假に極めて讀んでゐたこと。そのなんとか權所有の、これもさう思へば國定教科書に似つかわしい、手紙の文例の宛名のやうな、人の名。そんな奥附の有様までが憶ひ

出された。

「國定教科書」や「小學唱歌」への言及は、作者の記憶によるものだろう。傍線部のように國定教科書の書体や挿画、奥付等が思い出されることによつて、自分の意識を少年時代の「憧憬の対象」であつた完璧な世界の方に向けてゆくことに注目したい。これらが連続的に「憶ひ出され」ることで、峻は次のように考へる。

單純で、平明で、健康な世界。——今その世界が彼の前にある。思ひもかけず、こんな田舎の綠樹の蔭に、その世界はもつと新鮮な形を具へて存在してゐる。そんな國定教科書風な感傷のなかに、彼は彼の營むべき生活が示唆されたやうな氣がした。——食つてしまひたくなるやうな風景に對する愛着と、幼い時の回顧や新しい生活の想像とで彼の時どきの瞬間が燃えた。

このように、憧憬の対象であつた世界が思い出されることによつて、眼前に存在する何となく魅せられ、羨ましく思う世界に接近することができるのだ。言い換えれば、急に何かが「憶ひ出され」ることによつて、眼前の不愉快な氣持ち、ある「幸福」に手が届かない感情から暫く〈脱出〉することができることである。また、そのような〈脱出〉によつて〈心〉が洗われたり、これからの新たな生活が仄めかされたやうな氣になるのである。

## 五、「楓樹」の機能

先述のように、「晝と夜」の前半では城のそばの井戸の水で洗濯している若い二人の女を垣間見ながら「少年時代」の様々な思い出を想起することが語られている。後半では夜の不眠について語る中で「楓樹」に触れる。ここでは、この「楓樹」の機能及び峻の（心身）との関わりについて考察したい。

また時どき寝られない夜が来た。寝られない夜のあとでは、一寸したことに直ぐ底熱い昂奮が起きる。その昂奮がやむと道傍でもかまはない直ぐ横になり度いやうな疲労が来る。そんな昂奮は楓の肌を見てさへ起つた。

ここでは「楓の肌」が峻の（心）に不眠の後の「底熱い昂奮」を感じさせる機能を持っている。ここで本作品に見られる「昂奮」という言葉に注目したい。序章の「ある午後」には次のような一節がある。

義兄と姉とその娘と四人で初めて此の城跡へ登つた。早の為うんかがたくさん田に湧いたのを除蟲燈で殺してゐる。それがもうあと二三日だからといふので、それを見にあがつたのだつた。平野は見渡す限り除蟲燈の海だつた。遠くになると星のやうに瞬いてゐる。山の峽間がぼうと照らされて、そこから大河のやうに流れ出てゐる所もあつた。彼はその異常な光景に昂奮して涙ぐんだ。

ここでも、峻は「除蟲燈の海」の光景に涙ぐむほど興奮して

いる。本作品における峻の「昂奮」を、「檸檬」に見られる主人公「私」の「昂奮」と対比してみよう。「檸檬」に次の二箇所がある。

・實際あんな單純な冷覺や觸覺や嗅覺や視覺が、ずつと昔からこればかり探してゐたのだと云ひ度くなつた程私にじっくりしたなんて私は不思議に思へる——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を輕やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな氣持ちさへ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思ひ浮べては歩いてゐた。

・「あ、さうださうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶ひ出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試して見たら。「さうだ」私にまた先ほどの輕やかな昂奮が歸つて來た。

「私」の（心）を惹きつけたレモンを買つた後の氣持ち、丸善での憂鬱を紛らすため先ほどのレモンを思い出した時の氣持ちは、「輕やかな昂奮」であり、本作品に見られる「底熱い昂奮」とは対照的である。また、「檸檬」のレモンの冷たさと、「城のある町にて」の「楓の肌」の冷たさとは、両作品の主人公に好ましい感じをもたらすが、それぞれの冷たさから生じる「昂奮」の質が大きく異なる。続いて、次の部分を見てみたい。

楓樹の肌が冷えてゐた。（中略）冷たい楓の肌を見てゐ

と、ひぜんのやうについてある蘇の様が美しく見え  
た。子供の時の莫塵遊びの記憶——殊にその觸感が蘇つ  
た。

先の引用で見て来たように、「楓の肌」は峻の〈心〉に不眠  
の後の「底熱い昂奮」を感じさせる機能があるにもかかわら  
ず、点線部で〈美〉的な表象となつて注目にしたい。  
加えて、傍線部にあるように少年時代の「莫塵遊び」及び「そ  
の觸感」の記憶を想起させる機能を持つていたのである。さ  
らに、蘇った〈過去〉としての「莫塵遊び」及び「その觸感」  
を具体的に語る次の部分を見てみよう。

そして莫塵を敷くや否や直ぐその上へ跳び込んで、着物  
ぐるみぢかに地面の上へ轉がれる自由を楽しんで、  
「そんなことを思ひながら彼は直ぐにも頬べたを楓の  
肌につけて冷やして見たいやうな衝動を感じた。「やは  
り疲れてゐるのだな」彼は手足が軽く熱を持つてゐるの  
を知つた。

この部分から分かるように、峻は〈身体〉が求めている「快  
さ」を「冷たい楓の肌」に見出そうとしていたのである。つ  
まり「楓樹」は、峻に不眠の後の「底熱い昂奮」を感じさせ  
る機能と、「美しい」模様を持ちながらも、同時に少年時代  
の懐かしい記憶を想起させ、熱い身体を冷やす機能を持つて  
いることが分かる。したがって、「楓樹」は峻にとつて正反  
対の二つの機能を持つものとして設定されていると言えるの

ではないか。そのような「楓樹」の描かれ方は、同時期の「樟  
椽」の「私」の〈心〉を落ち着かせるレモンの描かれ方と明  
らかに違ふと思われる。

では、なぜ峻が何の変哲もない「楓樹」を見て正反対のこ  
とを感じるのか。「楓樹」を見たり触ったりする行為の中に、  
〈心〉を興奮させようとしたり、あるいは〈身体〉を快く冷  
やそうとする峻自身の志向（意識）が潜在しているからであ  
ろう。以上のことから、眺めの対象である「楓樹」と峻の〈心  
身〉が如何に密接に関わつてゐるかを読み取ることができ  
る。

## 六、様々な〈サウンド〉への意識

ここまで、視覚による風景について考察してきたが、さら  
に、本作品においては「音」による風景の考察が必要であろ  
うと思われる。具体的には、「五位」、「蟬」、「虫」の鳴き声  
及び「雨の音」などの「田舎」の「音の風景」が峻の〈心〉  
とどのように関わるのかを検討したい。

### ①「五位」と一体化する〈心〉

「晝と夜」の後半に、夜に峻が静かに寝つけずにいるとい  
う次の場面がある。

空を五位が啼いて通つた。ふとするとその声が自分の身

體のどこかでしてゐるやうに思われることがある。虫の啼く声などもへんに部屋の中でのやうに聞こえる。

ここで、いくつかの点に着目する。まず、五位の鳴き声が自分の身体のどこかでしていることとあることから、峻が五位と一体となっていることだ。このことは峻が空を飛んでみたい感情を抱いていることを示すのではないかと考えられる。室内にいる峻は自由に空を飛ぶ五位のように解放されたいと感じたのではないか。「ある心の風景」の主人公の喬が火の見へ上がった次の一節を見てみよう。

喬は自分が解放されるのを感じた。そして、「いつもこへは登ることに極めよう」と思った。

五位が啼いて通つた。(三)

ここで注目したいのは、「五位が啼いて通つた」ことが「解放される」と一緒に描かれている点である。「城のある町にて」においても、「空を五位が啼いて通つていく時、室内にいる主人公は自分も五位のように解放されたいと感じているのではないか。さらに、ここで注目したいのは、まるで〈外〉の鳴き声と〈室内〉及び峻の〈心〉との間の境目がなくて、五位の鳴き声と峻の〈心〉が一体化しているように描かれることである。また、冒頭では峻が「静かな展望のなかへ吸い込まれていった」のに対し、ここでは、鳴き声が外部から峻の内面に入り込む形になっていることも指摘しておきたい。本作では、峻の〈心〉と〈外部〉は様々な形で関わ

っているのである。

## ② 蝉の「鳴き声」を聞き分ける耳

ここでは、つくつく法師等の鳴き声を聞き分ける峻の態度に着目したい。次の部分を見てみよう。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。『文法の語尾の變化をやつてゐるやうだな』ふとそんなに思つて見て、聞いてゐると不思議に興が乗つて來た。『チュクチュクチュク』と始めて『オーシ、チュクチュク』を繰り返へす、そのうちにそれが『チュクチュク、オーシ』になつたり『オーシ、チュクチュク』にもどつたりして、しまひに『ストコチーヨ』『ストコチーヨ』になつて『チー』と鳴きやんでしまふ。中途に横から『チユクチュク』とはじめるのが出來る。するとまた一つのは『ストコチーヨ』を終わつて『チー』に移りかけてゐる。三重四重、五重にも六重にも重なつて鳴いてゐる。

つくつく法師の鳴き声を文法の語尾変化に見立てるユーモアもさることながら、注目に値するのは、峻の〈聴く〉行為である。ここでは、つくつく法師の鳴き声を熱心に聞き入っている峻は、恰も積極的にその蝉の生き生きとしている〈生〉に接近しようとしているかのようである。続けて、次の

部分を見てみよう。

峻は此の間、(中略)法師蟬が鳴くのを、一尺ほどの間近で見た。(中略)身體の小さい昆虫に、よくあんな高い音が出せるものだ、驚きながら見てみた。その高い音と関係があると云へば、ただその腹から尻尾へかけての伸縮であつた。柔毛の密生している、節を持った、その部分は、まるでエンジンの或る部分のやうな正確さで動いてゐた。——その時の恰好が思ひ出せた。腹から尻尾へかけてのブリツとした膨らみ。隅々みまで力ではち切つたやうな伸び縮み。——そしてふと蟬一匹の生物が無上に勿體ないものだといふ氣持に打たれた。

峻は、法師蟬の鳴き声、およびその鳴き声が生み出される様子・仕組みを熱心に見聞きすることによつて、その泣き声の奥にある(自然)や、その泣き声が象徴していると考えられる(生)に近づこうとしているように思われる。峻はその(自然)や(生)との関わりを通して、妹の死に接して悲嘆にくれた(心)を癒そうとしているのである。法師蟬の持つ小さな生命の重みを再確認するきっかけとなつてゐるのが、ほかならぬ鳴き声への意識なのである。

### ③ 「虫の声」と「雨の音」

終章の「雨」は、信子との別れの前日を描き、物語は締め

くくられる。峻は眠れない夜を過ごす。十二時頃「夕立」が降る次の箇所を見てみよう。

夜はその夜も眠りにくかつた。十二時頃夕立がした。その續きを彼は心待ちに寝てみた。暫くするとそれが遠くからまた歩み寄つて来る音がした。虫の音が、雨の音に變つた。ひとしきりするとそれはまた町の方へ過ぎて行つた。

夜に眠れない峻は遠くから歩み寄つたり、町の方へ行つたりする「雨の音」及び(戸外)の「虫の声」に(心)を向けているのである。部屋の外へ(心)を脱出させようとしているのである。右の部分に加え、次の箇所を交えて考察を進めよう。

また夕立が来た。彼は關の上へ腰をかけ、雨で足を冷やした。(中略)雨の脚が強くなつて、とゆがこくりこくり喉を鳴らし出した。(中略)夕立はまた町の方へ行つてしまつた。遠くでその音がしてゐる。「チン、チン」「チン、チン」鳴きだしたこおろぎの声にまじつて、質の緻密な玉を硬度の高い金屬ではじくやうな虫も鳴き出した。

まず、ここで雨は峻の熱い身体を快く冷やす機能を持つてゐることが指摘できよう。また、右の二箇所の傍線部と点線部を合せて考えてみると、「雨の音」と「虫の声」は交互に描かれ、二つは信子と別れ、熱い身体、不眠に苦悶している

峻の〈心〉を代わる代わる〈戸外〉の方に惹きつける作用があるのではないか。だからこそ、結末部分で峻は自分の〈心身〉の苦悩を紛らす「もう一つ夕立が来るのを待っていいのである」。

## 七、結論

「城のある町にて」は先行論<sup>(8)</sup>が述べてきたように、「雪後」と並んで、梶井の他作品にはない例外的な明るさを持っているという印象を受ける。だが、その明るさが作品の「隅々にまで」<sup>(注5)前掲書</sup>というわけではない。そうかといって、病いを患った作者の暗い影が「色濃く」<sup>(注4)前掲書</sup>表れているとも言えない。本作品は、明るさを交えながら、峻の〈心身〉の苦しみを描いている作品なのである。

以上に見てきたように、峻は「都會」から「田舎」へ、「城跡」から「静かな展望」の中へ、「読書や妄想」のある部屋から「心を燃えさせる」秋の風景へ、下劣な手品師に対する「不愉快」から「先ほどの花火」の光景へ、手が届かない眼前の「羨ましくて幸福さうな眺め」から「少年時代」の思い出へ、信子との別れを惜しむ気持ち、熱い身体、不眠から〈戸外〉の「雨の音」と「虫の声」へ等という風に自分の〈心〉を「田舎の風景」、「鳥」、「水」、「木々」、「音」等へと向けることによって、不快からの〈脱出〉を試みるのである。

このような峻の〈心〉と「新しい周囲」との交わり合いは、「城のある町にて」の六つの章を結びつける〈糸〉のようになっているのではないか。本作品の六篇は、先行研究で言われているような、関連性のない〈組曲風〉であるなどと言うことはできない。

## 注

(1) 鶴田欣也「梶井基次郎の性のイメージ」(国文学 解釈と教材の研究、一九七四年六月)。氏は、『城のある町にて』は死に参与した者が次第に生に参与していく過程を描いた作品である。そしてその過程にはさりげなくいくつかの生が配置されている。神主のような米つきばった、『ハリケンハッチのオートバイ』と叫ぶ女の子達、星水母のように光る花火、『もつとぎょうつと』と峻に抱きすくめさせる勝子、若い二人の洗濯女等、主人公はそれらの経験を通して徐々により死から逃れ生命に近づいて行く」と「生死」の観点から述べている。

(2) 古閑章『城のある町にて』の世界——死と生のロンド——(『日本近代文学』、一九八四年一〇月)。「生と死の二つのベクトルを有する峻が生へのベクトルに意志的なまなざしを注(う)とした」とも指摘している。

(3) 渡部芳紀「城のある町にて」論(『日本近代文学』、一九七五年九月)。さらに氏は、「が、そうした病気の影はなるべく作品の背後におさえつけられている。そうしたものをおさえつけ

た上に形づけられたか、その明るい世界が「城のある町にて」なのだといふことができるかもしれない」と述べている。

- (4) 黒田征『城のある町にて』(『国文学 解釈と鑑賞』、一九八二年四月)

- (5) 中谷孝雄『梶井基次郎』(筑摩書房、一九六一年六月)

(6) 前掲4黒田征氏論。さらに氏は、「峻は、闇の中で、一人目を覚まし、近くに鳴く虫の声を傾ける。虫の声を傾けるといふよりも、むしろ病める自分の心の風景に見入っていると言うべきであらう。健康な生活が、もはや自分には、拒まれているのだらう」と主張するが、根拠を明白にしない。

- (7) 渥見秀夫『城のある町にて』論——梶井基次郎初期作品の世界(『愛媛大学教育学部紀要(人文・社会)』、一九九七年九月)

- (8) 鈴木貞美『梶井基次郎 表現する魂』(新潮社、一九九六年三月、一六九頁)

- (9) 河盛好蔵『梶井基次郎と音楽——文学巷談(10)』(『新潮』、一九七二年二月号、二二八—二九頁)。さらに浜川勝彦氏は、『鑑賞日本現代文学』⑦ 梶井基次郎・中島敦(角川書店、一九八二年一月)で、本作品の構成について『城のある町にて』は全体が細曲風の構成を持ち、『ある午後』『手品と花火』『病氣』『勝子』『昼と夜』『雨』の六章から成り立っている」と述べる。

- (10) 前掲4黒田氏論は、冒頭の「片手に洋傘、片手に扇子と日

本手拭を持つている。頭が奇麗に禿げていて、カンカン帽子を冠っているのが、まるで栓をはめたように見える」という老人の描写について、「極めて戯画化され、類型的である」と指摘している。また、中沢弥「梶井基次郎をめぐるユナニムな感覚——『城のある町にて』を起点に——」(『文芸と批評』、一九九九年五月)も「ちぐはぐな持ち物(洋傘と扇子・日本手ぬぐい)と『栓をはめたように見える』カンカン帽子によつていくぶん滑稽化されて捉えられている」とするが、両者の見解には傾聴すべきものがある。

- (11) 佐藤昭夫『城のある町にて』(『国文学解釈と鑑賞』、一九九九年六月)

- (12) 梶井基次郎『梶井基次郎全集』(筑摩書房、二〇〇〇年九月、第一巻、二二三頁)

- (13) 石川啄木『石川啄木全集』(岩波書店、一九五三年九月—一九五四年五月)

(14) インド人の下品なマナーに対する「非人情に見る」こと、及び「病氣」という章の「他所目に見る」という態度は、梶井が愛読した漱石の「草枕」からの影響ではないかと思われる。

- (15) 文部省の『尋常小学読本』三、(一九〇三年九月三日初刊)。本文に見られる「四方」という題や「挿繪」は、この『尋常小学校読本』三の「ダイ十三 シホー」のことである。また峻が思い出す「子供が朝日の方を向いて手を上げてゐる図」も「ダイ十三 シホー」に見える。「何とか権所有」は、無論「著作

権所有」である。

- (16) 主人公峻が思い出す「かあかあ鳥が鳴いてゆく／お寺の屋根へ、お宮の森へ／かあかあ鳥が鳴いてゆく」という小学唱歌の原文は、『尋常小学読本』一、(一九〇三年八月初刊)にあるが、「からすからす何処へ行く」が抜け、原文の「お宮の森へ、お寺の屋根へ」が逆になっていることが分かる。

- (17) 山岸美穂・山岸健『NHKブックス 音の風景とは何か』(日本放送出版、二〇〇五年二月)

- (18) 安藤靖彦『城のある町にて』と『雪後』(『説林』、一九八五年二月)

【付記】本文の引用は筑摩書房刊『梶井基次郎全集一卷』(一九九九年一月)に拠った。本文中の傍線・二重傍線・傍点・点線・破線・あみかけは執筆者によるものである。

- (ア)ブドエルマクス・ワイル／本学大学院博士後期課程)